雲ひとつ無いよく晴れた冬空の下、私を乗せた電車はごうごうと車輪の音を立てて走っている。

土が剥き出しになった侘しい田園の風景が、車窓を延々と流れていく。窓枠を額縁と捉え、カメラのシャッターを切るように瞬きを繰り返してみたが、何度試しても似たような景色が何度も続くばかりでなんの面白みもありはしない。

私はロングシートの背もたれに肩肘を着きながら、そんな代わり映えの無い冬枯れの様をぼんやりと眺めていた。

遠くの山には薄らと雪が積もっている。視界に入っているだけで外の寒さまでもが身に染みてくるようで、思わず身震いをしてしまった。坊主頭を隠すために被ったハンチング帽を深く被り直し、トレンチコートのポケットに片手を突っ込んだ。中にある細々した物に指先が触れる。財布にスマートフォン、そしてあても無く買った終点までの切符。

この電車に乗った理由は特に無かった。長い集団生活の果てにようやく自由の身になったは良いものの、今はただ目的も無く、線路の向くままに車両に揺られるばかりである。やりたい事も思いつかず、時間を潰す為だけの時間を過ごしていた。

思考は一定の範囲から逸脱しないよう自制心という鍵にかけられ、そのすぐ側には濃い霧が満ち満ちている。それこそが私の犯した罪に対する意識そのものであり、私はこれからの人生をこの霧と共に過ごしていかなくてはならない。

ただ、もう少し前までこの霧には確かな実体があった。

それは鎖であり、警告を示す金網であり、その先に何も無い崖の縁であった。しかしやがてそういった形はぼんやりと失われていき、いつの間にかこんないかにもぼんやりとした物に移り変わっていたのだ。

しかし霧がどのような形をしていたとして、時間と共に変化していったとして、一体それがなんだと言うのだろう。私は今や自制の鍵が許す中に収まり、ものも言わず大人しく座り込んでいる。不意に立ち上がり暴れ出す素振りさえ見せず、心象風景のような田園をぼんやり眺めるだけの余裕さえ持ち合わせている。それでいいじゃないか。

不意に鼻腔が震えた。少し埃っぽい暖房の向こうに外から流れ込んだツンとくる寒さと甘さが混じっており、私は再度体を震えさせた。いかにも冬らしい景色ばかり見ていたせいかいつの間にかすっかり体の内が凍えてしまった。私はもぞもぞと姿勢を改め、車両内へと視線を戻した。

全体的に清掃が行き届いておらず、どことなく古っぽい印象を受ける車両内には、誰の為か分からない多種多様なバナー広告が所狭しと貼られている。見ているだけで圧倒的な情報量が私の視界を責め立ててくる。名前も知らない若い俳優や女優の見事な笑い顔が私を見下ろしている。

あぁ、しかし……まだ居る。私の向かいのロングシート、深緑の毛羽立った席の端に彼は居た。背丈が足りず膝を立て、窓ガラスに張り付くようにして外を眺めている少年の横顔をチラリと見やり、私は小さく嘆息した。

両親は一体どんな教育をしているのだろう。公共の場であんな膝立ちになって。10歳かそこら、小学生高学年ぐらいに見えた。寒さなんて感じないのか、背中に英字が描かれた薄手のトレーナー、下は短パンという出で立ちで、靴下もくるぶし丈のものを着用している。電車の揺れによってプラプラと脱げかけの靴が揺れ、私の意識がその不規則な動きに吸われていく。

私は首を横に振り、思い切り息を吸い込んだ。やはり埃っぽく、冷たく、微かに甘い匂いがある。その原因もやはりあの少年にあった。具体的には少年のすぐ隣に据えられた紙袋が原因である。

距離があるために定かでは無いが、私はその匂いと、車両が揺れる度に覗くその赤い色味から紙袋には林檎が入っているのではないか、と予想した。それも結構な量の林檎だ。その証拠に紙袋は座席上で不安定ながらも自立している。爽やかな果汁の匂いはまるで少年の存在そのものを示しているようで、どれだけ遠ざけようとしても無意識の内に私の霧の中に混じってくる。何とか気を紛らわせようと外を見ていたのに、少年が降りる駅はまだ先なのだろうか。

いつまでこんな時間が続くんだろうか。今日何度目かの溜め息が肺の底から漏れ出ていく。よせばいいのに私の意識は少年の横顔へと……細い髪、陽の光を受けた頬は林檎にも似た赤みが差している。向かいの車窓にも、私が見ていたような冬枯れの田園が広がっている。何が面白いのか少年の目はそれを食い入るように見つめていた。

子供の目は綺麗だ。黒目がはっきりとしていて、白目が濁っていない。あちこちに溢れるヨゴレを知らず、綺麗なものだけで構成された世の中を映し出している。

いずれヨゴレを吸収し、汚染されて白目は濁っていく。濁りと共に世の中の見え方も変わってくる。私はそれこそが大人になる、という事だと考えている。その点あの少年はまだ純粋な子供なのだろう。

私の霧がさざ波立っていく。これは良くない兆候だ。そう思った時、不意に外が真っ暗になりごうごうという電車の音が大きくなった。トンネルに入ったのだ。

外が見えなくなった事がつまらないのか、少年は軽やかに体をくねらせ席に座り直した。私は咄嗟に視線を切って素知らぬ顔をした。名も知らない男が自分の事を見ていたと彼が気付いて、怖がってはいけないと思ったからだ。しかし一度浮ついた心を即座に鎮めるのは難しく、私は非常に未練がましい事ながら少年の方を横目でチラリと見やった。

少年は私の存在などまるで気にしない様子で、ロングシートに深く背を持たれさせていた。僅かに床に届かない足をブラブラと揺らし、思い出したように紙袋を膝に乗せ、中から一つの林檎を取り出した。車両内の薄暗い照明を吸収したかのように林檎の表面はてらてらとした妖輝を備えていた。そして、それを両手で包んで見つめる少年の目にも実に蠱惑的な――。

私は意識的に視線を自身の正面へと向けた。そこには窓ガラスに映し出された私の姿がある。死人のように生気の無い表情、汚れきった眼。眺めているだけで、ふつふつと怒りが激しく湧き上がってくる。ズボンの下にある太ももに思い切り爪を立てた。霧が強風の

中で再び形を取り戻そうとしている。鎖が、金網が崖が私をキツく縛っている。私はそれを受け入れるべく、今まさに全身の力を込めて血が溢れんばかりに太ももに爪を立てているのである。

電車はやがてトンネルを抜ける。私が眩しさにやられ、手でひさしを作っているうちに、少年は身を翻し、林檎を手にしたまま再び車窓から流れる田園に釘付けになっていた。

暗がりから解き放たれたように太陽の光を一身に受けるその姿はまるで生命そのもので、冬枯れの景色に何を見出しているのか、その目の白さから希望が満ち溢れているように思えた。

私は胸の内で渦巻く深い霧を掻き抱いた。ほんの一瞬、鎖などの形を見出していたものの、トンネルを出た拍子に文字通り霧散してしまい、元の頼りないぼんやりとしたものに戻ってしまっていた。しかし私はもう、そんな霧を心の頼りにするしかないのである。反省と自制の中私は小さく、小さく端の方に座り込んでいる他選択肢は無い。そうしているべきなのである。

だと言うのに、私の心に反して体は全く違う選択を取ろうとしている。甘い匂いに誘惑されるままおもむろに立ち上がり霧の外へと、許された範囲より向こう側へ行こうと胸を震わせている。何度も、何度も必死の我慢をあっという間に飛び越えようとする。私はそれが怖くて仕方ない。

繰り返し深呼吸をする。車両内の暖房で肺を満たしていく。そうすると段々とごうごうという電車の大きな車輪の音が近い所に帰ってきた。一時的な混乱を乗り越え、私は正気に戻ったのだ。

ふぅ。と息をつき終点を迎えるまでの間、自分も車窓から流れる景色に僅かでも変化を見出そうと、少年を背にする形で体を捻った。そんな時、「あっ」という少年の高い声が車両内に響いた。

私は咄嗟に振り返り、声の方へ視線を向けた。

そして先程まで少年の手に握られていた林檎がコロコロと床を転がって、私の方へ近づいてくる事に気が付いた。

懸念は当たり、一つの林檎が楔となって紙袋というダムは音を立てて決壊した。慌てて少年が立ち上がると、勢いで紙袋は横倒しになり中身が全て車両内へとぶちまけられた。赤、赤、赤……馬鹿みたいに林檎が転げ回っている。

私は最も早く私の足元に来た一つ、恐らくは少年が握り締めていた林檎を手に取った。子供の体温は高い。ほんのりと温い林檎の表皮に少年を感じ取る事が出来る。私は席を立ち、幾つかの林檎を手の中に収まるだけ拾い上げた。

「あの」

私が床にしゃがみこんでいると、すぐ傍から少年の声がした。私はすぐに顔を上げることが出来ない。してはならない！ 恐ろしいまでの突風が私の胸の中で吹き荒れている。私はどこかへ飛んでいきかねない霧を必死に抱き締め、繋ぎ止めようと苦心していた。額に

汗が滲むのが分かる。少年は尚も「あのぉ」と高い声で(恐らく)私に話し掛けている。ゴクリ、と音がしたのはもしかしたら私が生唾を飲み込んだ音なのかもしれない。

それでも、しかし、私は極めて強靭な意思で自制を保った。汗を袖で拭いながら懸命に笑顔を作り、顔を上げて少年の方を見やった。そして想像よりもずっと近い所にあった少年の顔に、私は思わず「ヒッ」と喉の奥を鳴らしてしまった。

不思議そうに私を見つめる少年。その綺麗な目の中に私が映っている。死人のような顔をした私が。あぁ、どうやら私は笑顔なんて作れていなかったらしい。私の困惑など知る由も無く、少年は半分ほど林檎で埋まった紙袋を差し出してきた。私が拾い上げた林檎を入れれば恐らく満杯になるのだろう。恐る恐る、一つずつ丁寧に袋の中へと入れていく。

そして最後の一つ、何て事は無い。これを渡したら少年はきっと私からすぐさま離れていく。私はその背を見送り、座っていた席に戻る。何一つ変わらないといった様子を演じ、外の景色をぼんやり眺める。それで良い。それで良いから、頼むから霧よ、私の霧よ傍に居てくれ。

手が止まっていたらしい。少年はいよいよ不審がっている。私が再度動き出すのと、少年が不意に私へと手を伸ばしたのはほぼ同時の事だった。決して故意ではなく、やけにスローモーションな世界の中、私の手に少年の指先が軽く触れた。ごうごうという音が遥か遠くへと飛んで消えていく。

全身の毛が逆立ち、限界まで瞼が開く。脳みそが突き抜けるほどの爽やかで甘い匂いが私の思考を埋めていく。赤い林檎、そして少年の指先が私の手を離れていく。紙袋の中で揺れる林檎の妖艶な滑らかさに、情念を深く自覚させられた。極度の興奮状態に陥っていくのが感覚で分かる。

スローモーションは続いている。不意に視線を上げた少年の白目に、私の影が残っていた。手が、私の手がゆっくりと伸びていく。指は何かを掴む為に小さく開かれており、ゴツゴツとした骨や血管が皮膚の下で蠢いている。

しかし、少年はまるで踊るような動きで私から離れた。ごうごうとした音が無い。電車が止まっている？ 駅に着いたのだ。名も知らぬどこぞの田舎駅に。

少年は全ての林檎を回収し終えた事に心底安心した様子で、最後に私を見下ろし「ありがとうございました」と冬晴れよりも底抜けに明るい調子で言って、笑顔のまま駆け出した。開け放たれたドアから光の中へと消えていき、車両内からはすぐに背中も見えなくなってしまった。

私は暫くの間床にしゃがみこんだままでいた。ドアが閉まり、再び電車が動き始めてごうごうと音を立て始めてもまるで動けずにいた。打ちひしがれていたのだ。

あの瞬間霧は消えていた。自ら捨てていたのだ。

車両が大きく揺れた。私は体のバランスを崩し、ロングシートの角で頭を強かにぶつけた。じんわりと広がる痛みが私の存在全てを非難しているように思え、目に滲んだ涙さえ拭う気になれなかった。

何が霧だというのか、私は情念をまるで捨てられていなかった。麻薬じみた快楽の味を知る脳は、ただそれを見えにくい位置に遠ざけていたに過ぎなかったのだ。霧の向こうにそれは永遠に存在している。今も剥き出しの姿で、少年の目に私は、私という人間は！

いつの間にか太陽は山向こうに姿を隠してしまっていた。車両内は薄暗い陰に包まれ、私はいつまでも車両の端で小さく丸まっていたのだった。